荒木牧人作「ある高校３年生の受験記」

＜前編＞

会田政幸　俺は今、第 2、第 3 志望の大学の合格発表を待ってる。電話なのか、速達伝票なのかは分からないけど、とにかく今日、来るはずなんだ。

ナレーション　俺は会田政幸、18 歳。もう高校生活も終わったと同然、自宅学習期間で、1 月の下旬から 2 月の終わりまで、学校は休みなんだ。理系クラスだった俺は、共学高校の中の男子クラスとして、3 年間を過ごしてきた。だから女子の友達とかは一人もいない。でも、大親友と呼べる男友達なら何人かいた。今の 3 年のクラスでも一人、ちっと面白い関係の親友ができたんだ。そいつの名は中村陸。3 年の 10 月まで、そいつとはあまり話したことはなかったんだけど、あれは文化祭、体育祭が終わっていよいよ進路を決定しなければならなくなったころだった。

(効果音)　(クラスのガヤ)

宗高先生　それじゃ今日からみんなに進路調査票を渡すから、この時間内に、…終わらない者は明日までに、提出すること。いいな？

男子　(口々に)「はーい」(ガヤ)

政幸　先生。宗高先生！

宗高先生　ン？ 何だ、会田？

政幸　大学案内の本、これ 4 月のじゃないっすか。新しいのはないんですか？

宗高先生　え？ あるはずだぞ。そこの本棚に 9 月号が…。ないか？

政幸　見たけど、ないです。

宗高先生　おっかしいな。おーい、誰か進路の本、持ってってないか？

男子　持ってませんよー。

宗高先生　うーん。…じゃあ会田、また新しいのもらうから、あとで職員室に来てくれ。

政幸　(しぶしぶ)はーい。

政幸ナレーション　その時だった。僕のところに、クラスのボケの突っ込み役、小杉大樹が来た。やつとは高1の時からの悪友同士だ。

大樹　政、確かあれね、陸ちゃんが持ってたよ。放課後に残って熱心に読んでたの、見たぜ。

政幸　マジ？ 陸ちゃんが？

ナレーション　と俺が言ったのが、その中村陸。おっとりとした坊っちゃんタイプで、それまでは特に仲がいいわけでもなかった。

大樹　おう。聞いてみろ。

政幸　そうする。陸ちゃまー。

中村陸　なあに？

政幸　進路の本、持ってる？

陸　ン？ うん。実は…僕が持ってる。

政幸　やっぱそう。正直に言えよな。で、今、家にあんの？

陸　うん。ごめんね。明日、絶対持ってくっから。

政幸　ああ、別にすぐ、急いでいるわけじゃないし。でも陸ちゃん、すごーく進路迷ってるらしいじゃん。

陸　うん。でも…いろいろあって結局まだなんだ。会田君は？

政幸　第2と第3志望大は決まったんだけど、第1志望がちょっと…。

陸　先生、なんか言ってたでしょ？

政幸　ああ。「第1志望を早く決定しないことには、その大学に合った勉強ができんだろう」って言われた。

陸　だろうね。10月だもんね。.

ナレーション　話はその時間だけでは物足りなくて、結局俺たちはその日の放課後から教室に残り、勉強と進路研究を一緒にやることにしたんだ.。大樹も一緒だった。

政幸　俺、第1志望はやっぱ、青春大にしようかな。

陸　青春大かぁ。あそこはキリスト教系の大学だよね、確か。

政幸　うん。何か行きたくなってさ。昔、幼稚園がキリスト教の教会の隣にあって、日曜になると教会に行ってたんだ。うちの親、二人ともクリスチャンだし…。

陸　へえ、そうなんだ。

政幸　何かキリスト教の礼拝とかに出ると、俺、妙に落ち着くんだよ。昔っから行ってたってこともあると思うんだけどね。

陸　ふーん、会田君、教会に行ってんの。

政幸　あ、名前で呼べよ。政幸でも政でもいいや。こいつも大樹でいいぞ。教会は毎週ってわけじゃないよ。クリスマスとかイースターとかにさ。

陸　ふーん。僕はまだ一度もないんだ。外国映画とかでは見るけど。高い天井で、ステンドグラスがあって…。

政幸　ああ、あれはさあ、カトリック教会だよ。俺の親たちは、プロテスタントなんだ。だから教会の建物もそんなにデカくない。

陸　ふーん。カトリックのほうが金持ちなの？

政幸　え？　さあねえ。考えたことない。

大樹　そうなんじゃねえの。だって、普通の家だって、金持ちはデカいの建てるじゃん。

政幸　大樹、お前は教会行ったことあんのかよ。

大樹　俺？　ねえよ。ほら、俺んちお寺だろ？　教会なんか行きたくたって行かしてくんねえと思うよ、多分。もっとも、おやじは、「ほかの宗教のこともよく学んで仲良くしろ」なんて言ってるから、案外言えば「なら行っていい」なんて言うかもな。

陸　ふーん。じゃ大樹君は、大学も仏教系のところへ行くんだ。

大樹　いや、実はまだ親に相談してないんだ。言えばきっとそう言われるけど、俺は太陽大に行きたいんだ。あそこ、サッカー強いしさ。

政幸　そっか。太陽大か。ところで陸ちゃんはどこ行くつもりなんだよ。

陸　僕？　僕はやっぱ高嶺大医学部だろうなぁ。おやじもおふくろもあそこ出て医者だろ。もう二人とも僕がそこを出て跡を継ぐと決め込んでるみたいだし。

大樹　お前はラッキーだよな。何の苦労もなく、“親の路線をまっしぐら”ってやつか。

陸　だけどね、親を見てると、何か金持ちになるため医者をやってるような気がしてさ。“何のために医者になるのか”、そこんとこが自分なりにイマイチ納得できないんだよ。

政幸　そりゃ陸ちゃん、ぜいたくな悩みってもんでしょうが。

ナレーション　そうは言いながらも、俺は以外にまじめな陸の一面を知って、内心ハッとしていた。 次の日から、俺のクラスは午後の授業がつぶれて、臨時二者面談が始まった。

宗高先生　会田は…、第1志望がまだだったんだよな。決まったか？

政幸　ええ。やっぱり青春大にしました。

宗高先生　そうか。青春大…だな。まあ勉強のほうも頑張ってるみたいだし、いいんじゃないかな。この大学はキリスト教系列の大学だが、ご両親の推薦なのかな？

政幸　ええ、まあ。

宗高先生　会田もご両親と同じ、クリスチャンなんだろ？

政幸　いいえ、僕はまだ…。

宗高先生　そうか。学科は神学科と外国語学課が主なものだが、もう調べてるな？

政幸　はい、一応。

宗高先生　よし、あと3か月だ。頑張れよ。

（効果音）　（教室の引き戸を開ける音）

政幸　ありがとうございました。次は小杉君です。呼んできます。

陸　ああ、政幸君、やっと終わった。

政幸　あ！　陸ちゃん、待っててくれたんだ。悪いね。

陸　大樹君なら、そこにいるよ。

政幸　マジ？　大樹ちゃーん、君の番だよーん。

大樹　うわ、ヤベー。どうしよう。政、俺、進路まだ決まってないよ。

政幸　え、ほんと？　だってこの間も「太陽大行く！」って言ってたじゃん。どうしたの？

大樹　うーん、それがさあ。もう言わなきゃってと思って、ゆうべ、思い切っておやじに「太陽大学行かしてくれ」って言ったんだ。そしたら即座に「うちは、男はお前しかいないんだから、お前は俺の跡を継ぐんだ」って言われちゃってよぉ。「大学は行かずに修行だ。もしどうしても行きたいなら、仏教大学にしろ」だって。あーあ、どうしよう。

政幸　「俺の人生だ！」って言っちゃえばいいじゃんよぉ。住職さんにはなりたくないんだろ？

大樹　うーん、何とも言えんわぁ。おやじに親孝行しなきゃならんし。でも大学行って勉強したいこともあるし…。

政幸　優柔不断なやっちゃなあ、お前も。

陸　大樹君、とりあえず先生待ってると思うから。

大樹　陸、お前はそうやって俺に究極の選択を急がせるんだな。

ナレーション　そう言って、大樹はしぶしぶ教室に入っていった。

陸　あ、政幸君、今度の日曜日なんだけど…。

政幸　あ、何？

陸　僕を教会に連れてってくれない？

ナレーション　ビックリした。まさか陸ちゃんから教会へのお誘いが来るとは思わなかった。

政幸　また一体全体どうした風の吹き回しだよ。

陸　うん。僕さあ、この前も言ったけど、このままトントン医学部に行って医者になっちゃっていいのかって考え出したらさあ、何か次から次に、今まで考えたこともないようなこと考え出しちゃってさあ。

政幸　例えば、…何だよ。

陸　　笑わないでよね。“何のために…生きるのかな”とか。

政幸　　陸ちゃんねえ。そんなことって、あんまし考えても分からないんじゃないの？　今の俺たちってそんなこと考えてる余裕ってないと思うよ。ま、いいや。俺もしばらく行ってねえし、陸ちゃんに教会の話をした手前もあるし、じゃ行ってみっか。

ナレーション　　俺はでも内心、陸の超まじめさに驚いていた。「こいつって、俺なんかよりずっと生きるってことを真剣に考えてる」。そう思うと、お坊っちゃんと思っていた陸が、何か尊敬すべき存在にすら思えてきた。 次の日、意外なことが起こった。

（効果音）（大樹が入ってくる教室の引き戸が開く音）

男子　　（どっと笑う音）

宗高先生　　おらぁ、静かにしろ！

男子　　だって先生、見てよ、小杉のやつ。

宗高先生　　ン？

ナレーション　　教室に入ってきた大樹の頭は、何と、青々とそり上げられて、丸坊主になっていたのだ。

＜後編＞

ナレーション　　僕は会田政幸。18歳の高校3年生。もう受験も終わり、今日はいよいよ第2志望校の合格発表日なのだ。僕は今、このクラスになってからできた親友、中村陸ちゃんとの出会いのことを、思い出している。あれは10月の、進路決定の時だった。探していたクラスの受験案内雑誌を、あいつが持っていたことから、口を利くようになり、ひょんなことから一緒に教会に行くことになったのだ。それにしてもショッキングだったのは、悪友小杉大樹の“丸坊主事件”だった。

陸　　あー、大樹君の頭…。

政幸　　いくら何でも、あれは…。やっぱり父親のほうが強かったか。

ナレーション　　彼の家はお寺だが、何でも、今回の進路決定で、父親との激しい言い合いになり、「そんなに跡を継がせたいなら、望みどおり、今すぐ出家してやる」とタンカを切って、頭をそったそうだ。

宗高先生　　気合い入ったなぁ、小杉！

大樹　　(泣き出しそうな声で)冷やかさないでよ、先生。

宗高先生　　（笑い)いや、悪い。お父さんと話し合った結果、あとで先生に教えてくれよ。

大樹　　はーい。あーあ…。

ナレーション　　次の日曜日に、俺は両親に誘われて時々行ったことのある、キリスト教の教会に、陸を連れて久しぶりに行ってみた。俺は内心、おっとりして苦労知らずのお坊っちゃんに見えた陸が、意外にまじめなのを知って驚いていた。「こいつは、何か俺にないものを持ってる。」そんな思いが、あいつに興味を持たせるきっかけになったのは確かだった。

陸　　ところで政幸君。僕さあ、この間も話したけど、ちょっと気持ちを整理したいんだよ。何か考え出したら、結構自分でもビックリするくらいマジになっちゃってさ。このままじゃ、受かっても大学で学ぶ気に慣れそうもないんだ。牧師さんって、初めての人でも、こんなに個人的な話、聞いてくれるかな。

政幸　　陸ちゃん、それは大丈夫だと思うよ。それがお前の目的なんだろ？

陸　　うん。よかった。

ナレーション　　俺は、そういう陸ちゃんの真剣そうな顔色を見て、何か胸を突かれた。

政幸　　俺たちが教会の入り口に入ろうとしたときだった。背後で聞き覚えのある声がした。

大樹　　ゲェー、ここって教会じゃんかよ！　あ！
政幸　　あ、大樹！
大樹　　政！　何でお前がここにいるんだ？
政幸　　それは俺のほうが聞きたいよ。何で大樹がここに来んの？
大樹　　実はな、文系クラスに矢口って子がいるだろ？　何を隠そう、俺の彼女なんだよ。そんで、今回の進路騒動で、俺がすんごく落ち込んでたら、「日曜日、会おうよ！」と言って、この地図くれたんだ。来てみりゃこれだ。何考えてんだ、
あいつ。
矢口ゆかり　　あ、大樹くーん！　来てくれたんだ！　入ってきてよ。あれ？　お隣にいるの、確か大樹君とおんなじクラスの人…。うわぁ、大樹君すごーい。いきなり 2 人もお友達連れてきてくれたんだぁ。
大樹　　あん、あのなあ、ゆかり。お前、うちが寺なの知ってて言ってんのか？
陸　　ま、入ろうよ。
政幸　　そうだな。
大樹　　お、おーい、何でお前らそんなにすんなり入っていくんだよ。
ナレーション　　矢口さんが教会にいるのは知っていたけど、あの“丸坊主“大樹の彼女だったってのは知らなかった。久しぶりの礼拝だったが、教会のみんなは「会田さん、お元気？」と快く俺を迎えてくれた。礼拝のあと、俺は陸ちゃんを牧師先生に紹介し、大樹や矢口さんも付き合って、4 人で話を聞くことにした。
谷山牧師　　中村君は、今、とても大切な人生の問題に直面してるんだねえ。でもこれは中村君だけじゃなくて、君たち一人一人の問題でもあると思うよ。「人は何のために生きるか」、この問いに対しての究極の答えは、1 つしかない。それは、私たちをつくり、この世に命あらしめた神様のために生きることだ。人間はね、この神様に背いて神から離れ、自分勝手な生き方を始めてしまった。それで、この大切な問いの答えも分からなくなってしまったんだね。だからまずしなけりゃならないのは、この神様のもとに帰ることだ。神のみ子のイエス様を心から信じることだよ。矢口さんも、それに気づいて、1 年前にクリスチャンになった。矢口さん、あの時の聖書の言葉、覚えてるかな？
ゆかり　　はい。「あなたの創造者を覚えよ。災いの日が来ないうちに。また『何の喜びもない』という年月が近づく前に。」伝道者の書 12 章 1 節です。
牧師　　うん。このまま君たちが目指す大学に行ったとしても、真の人生の目的が分からなかったら『何の喜びもない』日々が待ってるだけだよ。
ナレーション　　牧師にズバリこう言われると、何かカチンと来ないわけでもなかったが、でもそれなりに納得できる話ではあった。
牧師　　中村君、聖書、この箴言の付いた新約聖書をあげるから、読んでみるといいよ。君が感じている疑問に答えてくれるはずだ。今日は 2 つほど言っておこうか。医学の道は、人の命を救う道だよね。でも、機械的な延命技術だけでは、真に人を生かすことにはならないはずだ。箴言の 7 章 2 節には、「神の命令を守って、生きよ」とある。それから 9 章 11 節、「神によって、あなたの日は多くなり、あなたの命の年は増す。」神様を信じ、罪を赦され、感謝のうちに生きることが、本当に人を長生きさせると私は信じてる。実際、多くのそういうご老人を見てるからね。

ナレーション　陸ちゃんは、物も言わずにじっと牧師の話に聴き入っていた。

牧師　もう 1 つ、医者としてのお金との関係だね。11 章の 24 節ではこう言ってるよ。「ばらまいてもなお富む人があり、正当な支払いを惜しんでもかえって乏しくなるものがある。おおらかな人は肥え、人を潤す人は自分も潤される。」“人に与えることにって富む“、これが聖書の原則だよ。

ナレーション　それを聞いた時の陸ちゃんの目は輝いていた。やつだけじゃない。俺も大樹も、何かすげえものを発見したようで、妙に興奮していた。 それから数日した今日、俺は第 2 志望校の、追いかけるようにして第 3 志望校の不合格通知を受け取った。「あーあ」としか言えない。自信はあったのに。やはり現役で合格なんて甘いのだろうか。俺は少したってから陸ちゃんに電話した。

陸　(フィルター音)そう…か。でも、結果は結果だし、「神様のなさることは、いつも時にかなって美しい」って、今日読んだ聖書の箇所に書いてあったから…。

政幸　そうだな。うん、そうだ。陸ちゃん、いい言葉だよ、それ。どこだい？

陸　ええとね、「伝道者の書」4 章 11 節。

政幸　そっか。陸ちゃん、また暗記したんだな。すげえな。

ナレーション　俺は素直に驚いた。そして、「よし、俺ももっと聖書を読まなきゃ」と思っていた。そう、全く驚いたことに、あの時以来、俺たち 2 人は、毎週あの教会へ聖書の勉強をしに行くようになった。いや、2 人だけじゃない。丸坊主からちょっと毛が生えた大樹も、その学びに加わったのだ。やつの場合は、多分に矢口ゆかりが目当てらしいが、それだけではなさそうだ。仏教大学に入ると決めたやつは、“比較宗教”とかももっと勉強するために、やつなりに聖書を学ぶ気になったらしい。

それから 2 日後、いよいよ本命の青春大学合格発表の日が来た。その日はたまたま卒業式の練習やら何やらで、学校に行くことになっていた。

大樹　あーあ、おいら普段寝てるよ、この時間帯。むっちゃ眠い。ふわー(あくび)。

陸　政幸君、受かってるといいね。

政幸　ああ。ところで大樹、教会に行ってることって、おやじさん知ってるのか？

大樹　ああ。

政幸　何か言われなかった？

大樹　なーんも。でもなんかあの牧師先生のこと、おやじ知ってるらしくて、俺もビックリしたよ。

政幸　へえー。友達なの？

大樹　ああ。何でも若いころ、おやじもあの教会に何度か行って、顔見知りらしいんだ。

政幸　へえー。世の中狭いな。そう言えば牧師先生が言ってたよ、住職から牧師になった人もいるって。ま、神様のなさることは俺たちの頭を超えてる。俺たちも進む道は違うけど、どこでどう一緒になるか分からないぜ。

大樹　そうだな。俺が牧師になってもおかしくないわけだ。

陸　そうだよ、大樹君。僕だって、神様がそう考えるなら、牧師になるかもしれないんだ。頑張ろうよ。

ナレーション　「こいつら、本当にすげえや。」俺はそう思った。でもすごいのは、神様の力なんだ。

その日、俺は青春大学合格の知らせを受け取った。「神のなさることはすべて時にかなって美しい。」俺たち3人が、イエス・キリストを信じる時が来ないと誰が言えるだろう。

＜完＞